

選出理事候補者一覧

東京ブロック 定数 3名

(届出順、敬称略)

	氏名	勤務先
1	井上 真奈美	国立がん研究センター
2	岡村 智教	慶應義塾大学 医学部 衛生学公衆衛生学
3	井上 茂	東京医科大学 公衆衛生学分野

所 信 表 明

1	井上 真奈美	国立がん研究センター
<p>わが国では、この数十年間に疫学領域の研究及び研究者の質が格段に向上し、疫学先進国研究者と同じ土俵で研究を推進する成熟期に突入しています。これは、研究者個人の努力のみならず、学会が早い時期から、次世代研究者の育成、会員の多様性強化、学会誌の国際化に精力的に取り組み、様々な質の高い機会や情報を会員に提供して、やる気のある研究者が挑む機会を増やすなど、必要なインフラを環境レベルで整えてきたことに他なりません。この勢いを衰えさせず、更に前に進めるためには、研究者の育成はもちろんのこと、疫学研究分野の今後の展開に向け、世界の新たな潮流をとらえ、それに必要な仕組みを早い段階で整備することにより、会員研究者が第一線の舞台で挑むための素地を整えることこそ、学会に求められている役割であると考えます。このような取り組みに、これまでの経験や培ってきた国内外研究者とのネットワークを役立てたいと思い、日本疫学会選出理事に立候補いたします。</p>		

2	岡村 智教	慶應義塾大学 医学部 衛生学公衆衛生学
<p>これまで循環器疾患、代謝性疾患（脂質異常症、糖尿病など）分野を中心に、多くの観察研究を通じてこれらの疾患の日本人の危険因子の解明に従事してきた。現在は変性脂質やメタボロームなど新たな危険因子についても研究を進めている、一方、疾病の予防をリアルワールドで推進して行くためには、個人の生活習慣への介入や環境要因の改善が不可欠である。現状では、観察研究で得られた研究成果を社会実装していく際に大きな困難が伴い、多くの貴重な研究成果が実生活に生かされていない。今後は人文社会科学、法律や経済関係の研究者とも連携して、市民啓発や環境整備を通じて集団全体を変革できるような介入手法の開発、それを応用した社会制度の設計など、より実学的な疫学研究の推進が必要である。そのため日本疫学会の委員会活動等を通じて、行政や経済界との連携を図り、実社会で頼られる学会を目指して活動することが重要である。具体的には医学系以外も含む様々な場で求められている疫学的エビデンスの情報を収集して会員に周知し、社会実装に近い研究に着目する仕組みを構築する。また集団を対象とした介入研究など、これまであまり行われてこなかった研究分野を支援する体制を構築し、社会変革にダイレクトに貢献できる学会を目指したい。</p>		

3	井上 茂	東京医科大学 公衆衛生学分野
<p>私は1991年に東北大学医学部を卒業し、5年間の臨床経験を経て、1996年より東京医科大学公衆衛生学分野に在籍して、研究・教育に携わってきました。また、日本運動疫学会理事長、日本行動医学会理事長、International Society for Physical Activity and Health 理事・財務委員長のように他学会における学会運営の経験があります。このたび理事に立候補するにあたり所信を述べさせていただきます。1. 私の専門領域は身体活動の疫学です。特に、リスク要因としての身体活動のみならず、身体活動をアウトカムとした行動疫学、社会疫学に力を入れてきました。疫学は多様な周辺領域（臨床医学、身体活動、栄養、心理等）で必要とされています。関連する領域の研究者を本学会の活動に取り込み、学会の多様性に貢献します。2. 本学会理事として、これまで、人材の育成、疫学専門家制度の立ち上げ、同制度における専門家試験作成ワーキンググループ長、社会医学系専門医制度の運営等に関わってきました。人材育成を通して疫学の基盤形成に貢献します。3. 本学会には優れた若手研究者が多く、彼らが成長する機会を提供することが重要と考えます。若手研究者とのコミュニケーションを重視して活動してまいります。</p>		

※勤務先の記載は立候補時の申告に基づいています。